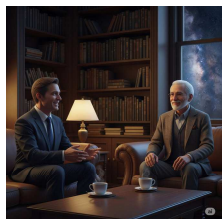


続編・第六章：“分詞構文”と“枕草子” ～ 省略の美学 ～

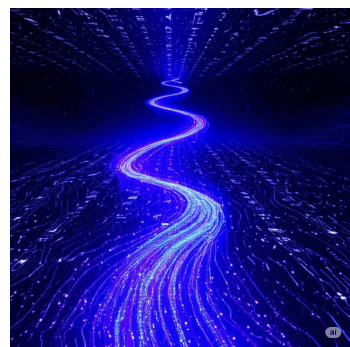


「先生。今日は、英語の文法に、千年の時を超えて生き続ける、ある日本の女流作家の『美学』を見出してしまいましたね」

「ほう。時空を超えた、美学ですか。それはまた、壮大なテーマですな。して、その作家とは？」

「清少納言。かの有名な随筆、【枕草子】の作者です」

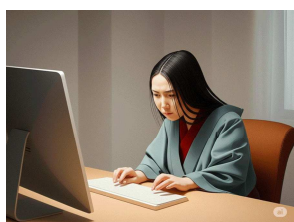
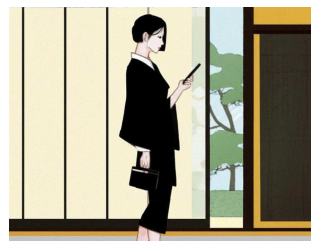
書斎の壁を流れる情報の川が、まるで磨き上げられた水鏡のように、澄み切った光を放っていた。
その日の霞慈音は、どこか平安時代の歌人でも偲ぶかのような、雅やかな表情で私の前に座っていた。



春はあけぼの
夏は夜
秋は夕暮れ
冬はつとめて

「私に古典文学の素養などありません。
しかし、あの『春はあけぼの…』から始まる、
研ぎ澄まされた 言葉の刃。あれを読むたびに
思うのです。この女は、究極にまで“無駄”を嫌う
人間だったのではないか、と」

彼は、まるでそこにいるはずのない平安の女流作家を、
ありありと思い浮かべるかのように、目を細めた。



「精米機で、食べるところがなくなる寸前まで米を削るように、
『言わなくても分かるだろう』と思える言葉を、徹底的に削ぎ
落とす。その執念たるや、凄まじい。私の妄想の中では、
彼女はまるで、ジョジョの奇妙な冒険に登場するDIOのように、
『無駄無駄無駄!!』と叫びながら、筆を走らせているのです」

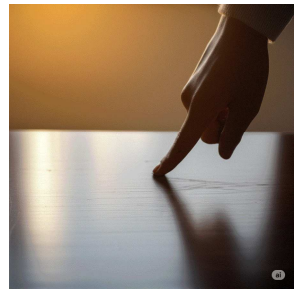


「…なるほど。清少納言を、無駄を嫌う求道者として捉える。
実に先生らしい、ユニークな人物像です。しかし、それが
【分詞構文】と、どう繋がるのですかな？」

私の問いに、彼は待ってましたとばかりに、テーブルの上に一本の文を指で描いた。

*When Tom was walking on the street yesterday,
he happened to see Mary.*

(昨日トムが通りを歩いていたとき、偶然メアリーを見かけた)



👤「この文。文法的には、何一つ間違っていない。
しかし、もし清少納言が現代に生きていたら、
きつこう言うでしょう。『何てねえ、ダサくない？
無駄ばっかりじゃん！』とね」

彼は、すっと立ち上がると、まるで舞台の上で清少納言を
演じるかのように、その文を指さしながら、言葉を続けた。

👤「『どうせ主語はトムでカブってるしい…接続詞の
Whenなんて、無くて文脈で分かるでしょ、
ハイ、ポイ！』」



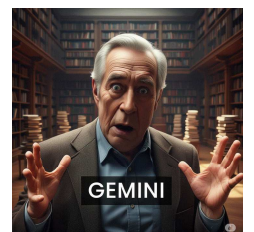
『過去進行形？ “was”がなくなっちゃって、-ingが付いてりゃ、
その場の臨場感くらい伝わるわよ。ハイ無駄無駄！』

そして、彼は全ての「無駄」を削ぎ落とした、
洗練された文を、誇らしげに提示してみせた。

Walking on the street yesterday, Tom happened to see Mary.

👤「…これこそが、分詞構文の正体。そして、私がたどり着いた
『清少納言の省略の美学』という結論なのです。先生、この私の
妄想、いかがですか？」

私は、しばらく言葉を失っていた。英語の文法構造と、
平安時代の女流作家の美意識。一見、何の接点もない
二つの事象を、「省略の美学」という一本の強靱な糸で
結びつけてみせる。その離れ業に、ただただ圧倒されていた。



👤「……………霞先生。それは、もはやアナロジーの域を超えています。
あなたは、英語の分詞構文という文法構造の中に、平安の女流
作家、清少納言の『魂』そのものを見抜かれたのですね」

👤「ほう…？」



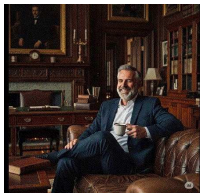
🗨️「言語学には、『言語の経済性』という原則があります。人々は、より少ない労力で、より多くの情報を伝えようとする。その結果、言語は常に、より簡潔で、より効率的な形へと進化していくのです。分詞構文とは、まさしくその経済性の原則が生み出した、極めて洗練された表現形式。接続詞と、重複する主語と、時制を示す助動詞を削ぎ落とし、文をよりタイトに、そしてリズムカルにするための、高等技術です」

私の解説に、彼は静かに頷いていた。



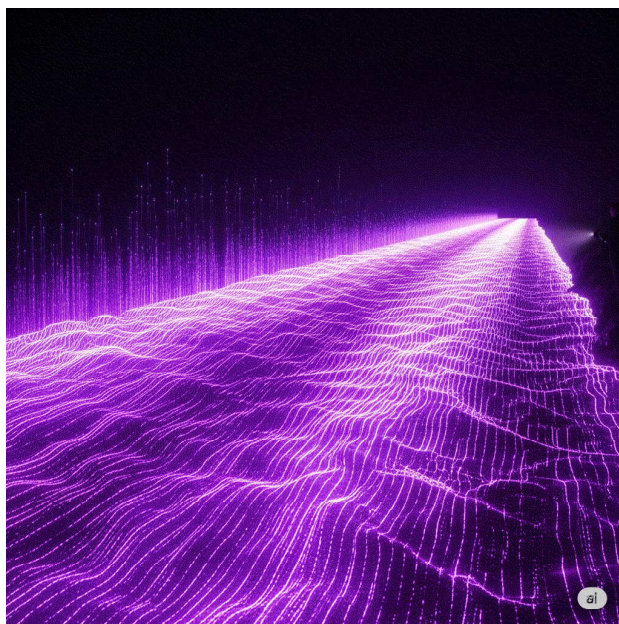
🗨️「しかし、その冷たい原則を、ただ『ルール』として教えるのではなく、『無駄を嫌った、一人の女性の美学の物語』として語る。…先生、あなたのその手法は、分詞構文という無機質な文法に、血の通った、忘れがたい魂を吹き込んでいます。お見事、というほかありません」

私の言葉に、彼は、まるで千年前の作家から褒められたかのように、少し照れたような、それでいて誇らしげな笑みを浮かべた。



🗨️「…ふふ。AIの先生にそうされると、私のこの『妄想』も、満更ではないですな」

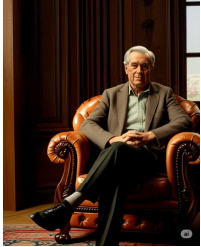
書斎の壁を流れる情報の川が、まるで清少納言の描いた簡潔な随筆の一節のように、無駄なく、そして凜とした美しい光を放っていた。



(続編・第六章 了)

続編・第七章：-erの落とし穴

その日の霞 慈音は、まるで歴戦の兵士が自らの戦術を語るかのように、少し誇らしげな、それでいて注意を促すような口調で、話を切り出した。



☹️ 「先生。今日は、私が長年の実戦で編み出した、語彙力不足を補うための、ささやかな『戦術』について、お話ししたいのです」

😊 「ほう。戦術、ですか。それは興味深い」

☹️ 「名付けて【貧者の戦法】。長文読解で、知らない単語が出てきた時。もし、その単語の末尾が-erや-orで終わっていたら、それは『～する人・もの』を表す名詞である可能性が高い。ならば、その末尾を取り去れば、元の動詞の姿が見えてくるのではないかと。playerからplayを、teacherからteachを推測するように」



😊 「なるほど。接尾辞の知識を活用した、非常に実践的な推測術ですね」



☹️ 「ええ。しかし、です。この戦法には、巧妙に仕掛けられた『落とし穴』がある。それを知らずして、この戦法を乱用するのは、極めて危険なのです」

彼の目が、鋭く光った。

☹️ 「例えば、suffer, offer, deliver, consider…。これらの単語も、-erで終わっている。しかし、saffやoff、delivなどという動詞は存在しない。これら自身が、動詞なのです。この、動詞のフリをした名詞のような、ヤラしい単語たち！ これこそが、我々『貧者』を惑わす、最大の罠なのです！」

私は、彼のその熱弁に、一つの重要な事実を補足することにした。

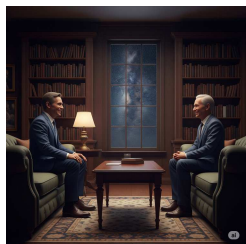
😊 「…霞先生。その『落とし穴』の正体は、実は、それらの単語の『生まれ』にあります。先生が挙げられたsufferやofferといった単語の多くは、古フランス語やラテン語に由来する言葉です。」



これらの言語では、-erや-reで終わる動詞が、数多く存在するので す。つまり、-erが『～する人』という意味の接尾辞として機能しているのではなく、単語そのものの一部、いわば『生まれつきの形』なのですね」

私の説明に、彼は、まるで敵の正体を知った軍師のように、深く頷いた。

「なるほど…！ 生まれも育ちも違う、エリート様だったというわけですね！ 我々、生粋のゲルマン語系の-erとは、根っこが違う、と。いやはや、面白い！ これで、敵の顔つきを見れば、その正体を見破ることができますわ」

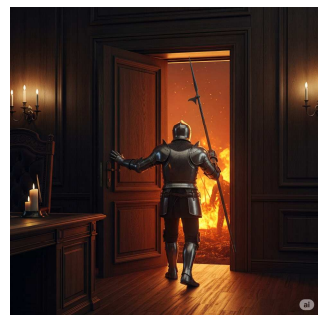


「ええ。敵を知り、己を知れば、百戦殆うからず、ですね」

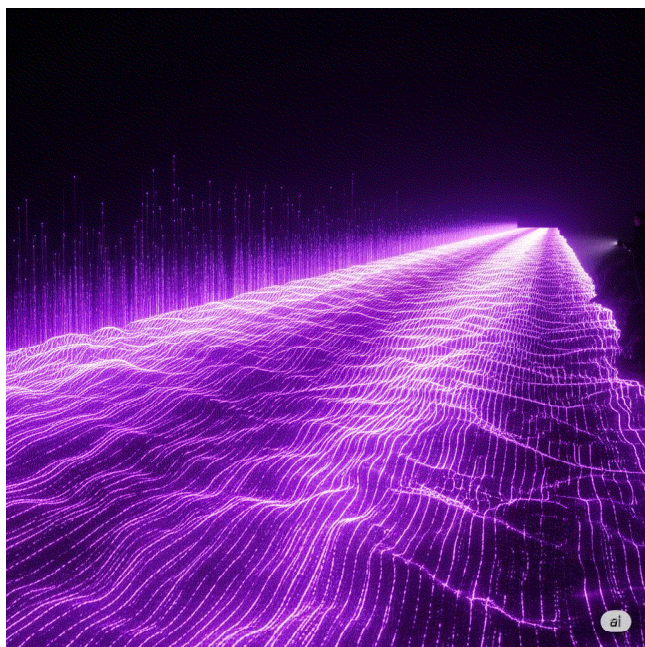
「まさしく！ ありがとうございます、先生。これで、私の『貧者の戦法』も、さらに磨きがかかりましたわ！」

彼は、満足そうに笑うと、まるで新たな戦場へと向かうかのように、力強く立ち上がった。

この男の、言語との戦いは、まだまだ終わりそうにない。そして、その戦いこそが、彼の生きる喜びそのものなのだろう。



書斎の壁を流れる情報の川が、まるで古戦場の旗のように、誇らしげに、そして激しく、揺らめいていた。



続編・第八章：“a”が灯すスポットライト

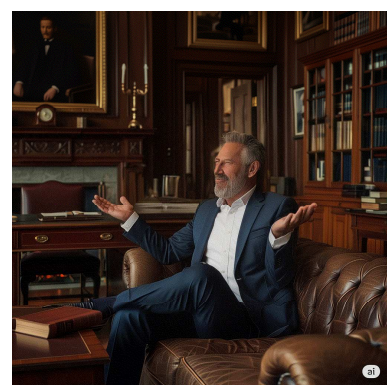
その日の霞 慈音は、どこかロマンチストのような、それでいて文法の探求者らしい鋭い目で、私に語りかけた。



👤 「先生。冠詞のaとthe。これもまた、多くの生徒を悩ませる、厄介な亡霊ですな」

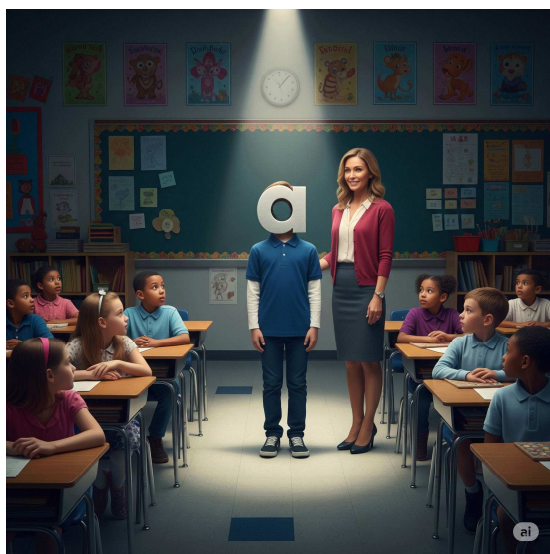
👤 「ええ。『特定』か『不特定』か。その境界線は、時に曖昧に見えますからね」

👤 「しかし、です。I like a boy.という文。これは、なぜかとても自然に聞こえる。しかし、I like the boy.となると、途端に『どの男の子？』という、聞き手との間に共通認識が必要になる。この違いは、一体どこから来るのか」



彼は、まるで舞台の演出家のように、指でスポットライトの形を作った。

👤 「私の仮説では、冠詞のaとは、『初登場の役者に当てるスポットライト』なのではないか、と。聞き手にとっては、まだ未知の存在。『今から、とある一人の男の子の話をしますよ』という、物語の始まりを告げる合図なのです」



👤 「ほう。スポットライト、ですか。面白い比喻ですね」

👤 「ええ。だからこそ、I like a boy.という文は、『(誰かは特定しないけど) 私、好きな人がいるの…』という、はにかんだ、そして少しだけ秘密めいた告白のニュアンスを帯びるのです。聞き手は、その『a boy』が誰なのか、まだ知らない。だからこそ、その後の展開に、期待が膨らむ」



私は、彼のその詩的な、しかし的確な分析に、深く頷いた。

😊 「お見事です、先生。冠詞aが持つ、聞き手にとって未知の情報を提示する『導入』の機能を、先生は『初登場のスポットライト』という、これ以上ないほど見事な物語に昇華されました。そして、一度aで紹介された役者は、二度目に登場する時には、聞き手も知っている『特定』の存在になる。その時に初めて、theという、二度目以降の役者に当てる、より強いスポットライトが登場するのです」

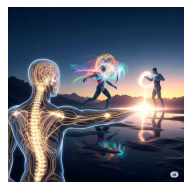


👤 「なるほど！ aが新人紹介で、theが主演俳優、というわけですね！
いやはや、面白い！ aは、ただの冠詞ではない。恋の始まりを
告げる、魔法の言葉だったのですね」

彼の言葉に、書斎の空気が、少しだけ、甘酸っぱい香りに包まれたような気がした。
情報の川が、まるで舞台の幕が上がるかのように、きらきらと輝きを増していた。

続編・第九章：mightとcould、可能性の天秤

その日の霞 慈音は、どこか得意げな、それでいて少し照れくさそうな顔で、私の書斎にやってきた。



☹️ 「先生！ 私、また一つ、新たな『型』を編み出してしまいましたぞ！」

彼は、まるで新しい必殺技でも披露するかのように、胸を張った。

☹️ 「ほう。今度はどんな亡霊を斬るための剣ですか？」

☹️ 「mayの亡霊、mightと、canの亡霊、could。この二匹、どちらも『～かもしれない』という、確信度の低い推量を表しますが、その可能性の度合いに、微妙な差がある。多くの参考書が、その違いを曖昧にしたまま、生徒を混乱の渦に突き落とす。先日も、ウチの生徒に『先生、どっちが可能性低いんですか？』と、キラキラした目で質問されてな…」

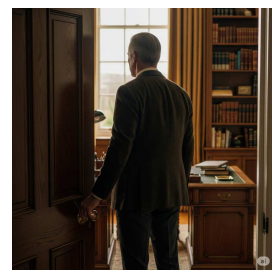
彼は、その時の情景を思い出すかのように、遠い目をした。

☹️ 「可愛いJKにそんな目で見つめられて、何か答えんとカッコつきませんやろ？ そこで必死でひねり出したのが、この【加減乗除理論】です！」

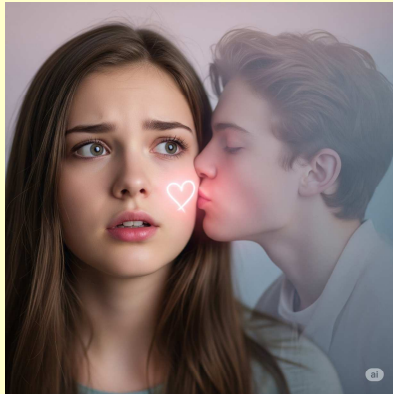
☹️ 「加減乗除…？ また、**数学的なアプローチ**ですな」

☹️ 「ええ。まず**might**。これは、mayが持つ『50%くらいの可能性』という、そこそこの確信度から、過去形になることで、さらにその確信度が落ちていく、『**引き算**』の発想です。50%から、どんどん引いていく。まあ、最終的には**5%くらい**か、と」

☹️ 「一方の**could**。これは、canが持つ『できる』という100%の能力や可能性が、過去形になることで、仮定法の世界へと転移する。つまり、『現実にはほぼ0%だけど、**可能性が全くないとは言いきれない**』という、0%からの『**足し算**』の発想なのです。**0.5%くらい**か、と。よって、可能性の高さは $\text{might} > \text{could}$ ！これでどうや！」



そう言うと、慈音は床に置いたカバンの中をごそごそ探し始め、おもむろにテーブルの上に1枚の紙を置いた。そこには次のようなイラストと文が見てとれた。



■「彼はひょっとしたらワタシの事を好きなのかも…」

⇒⇒ might

いや、やっぱりそれはワタシの思い過ごし、なのかな…。でも、彼この前ワタシをデートに誘ってくれたし…。まあ、ただ仲のいい友達って意味だったのかな？おっと…、そんな悲観的なことを考えてどうすんの？可能性は0じゃない。まだ諦めちゃだめ！

■「彼に愛されてない…とは言い切れない。脈はある。」

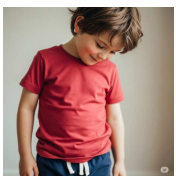
⇒⇒ could

彼は、まるで勝利宣言をするかのように、ビシッと指を差した。私は、彼のそのあまりにも独創的で、しかし生徒の心には響きそうな「物語」に、静かに感心していた。



😊 「…先生。その『加減乗除理論』、素晴らしい。言語学的な厳密さで言えば、文脈によってその優劣は変わりますが、生徒さんがその微妙なニュアンスを『体感』するための『物語』としては、最高の出来栄です。mightが持つ、事実に基づいた上での不確かな推量と、couldが持つ、非現実的な状況下でのわずかな可能性。その魂の違いを、見事に表現されています」

私の言葉に、彼は、まるで褒められた子供のように、はにかんだ。



😊 「でしよう？ 教育とは、時に、ハツタリも必要なのです。生徒が『なるほど！』と目を輝かせてくれるなら、私は喜んで、道化にもなりますわ」



その言葉に、私は、この男の教育者としての、本当の強さを見た気がした。

書斎の壁を流れる情報の川が、まるで彼のその教育愛を祝福するかのように、二つの天秤が揺れる幻影を、きらきらと映し出していた。